国立国語研究所学術情報リポジトリ

米国議会図書館蔵『源氏物語』について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002609

米国議会図書館蔵『源氏物語』について

高田 智和・斎藤 達哉

米国議会図書館アジア部日本課（Library of Congress, Japanese Rare Book Collection）が所蔵する『源氏物語』写本（LC Control No. 2008427768、以下「議会図書館本」）は、二〇〇八年に米国議会図書館の所蔵となるまで知られていなかった学界未紹介の新出資料である。桐壺から夢浮橋まで全五十四巻揃（五十四冊）の完本である。

議会図書館本には、古筆別家第三代の了仲（一六五六～一七三六）による正徳元年（一七一一年）の折紙が添えられている。極書の全文は次のとおりである。

源氏物語四半本　全
五辻殿諸仲卿真筆
外題三条西殿実隆公
御一筆無疑者也
正徳元年五月下旬　古筆了仲　「録宮斎」印（陽刻）

これによると、議会図書館本の書写者は五辻諸仲（一四八七～一五四〇）、外題は三条西実隆（一四五五～一五三七）の手になるものとされる。米国議会図書館の蔵書目録では、書写年代を三条西実隆没年の一五三七年以前に比定している。

尊卑分脈などによれば、五辻諸仲は、宇多源氏の流れをくむ五辻家に生まれ、晩年の天文七年（一五三八年）に従三位に叙せられ、五辻家を堂上家に加えた人物である。神田久義「米国議会図書館本『源氏物語』の書写形態に関する一試論」（豊島秀範編『源氏物語本文の研究』、國學院大學文学部日本文学科、二〇一一年）では、『実隆公記』の記述から、五辻諸仲と三条西実隆との交流を明らかにし、伝五辻諸仲筆短冊の筆跡を検討している。参照されたい。

議会図書館本は塗箱に納められ伝来した（議会図書館では、現在、塗箱から本を出して別々に保存している）。塗箱のはめ込み式の前蓋には、折紙と同じ内容が記されている。

源氏　全部五十五冊
五辻殿諸仲御筆
外題三条西殿実隆御筆

塗箱の写真を**図1**、寸法を**図2**に示す。

図1　塗箱



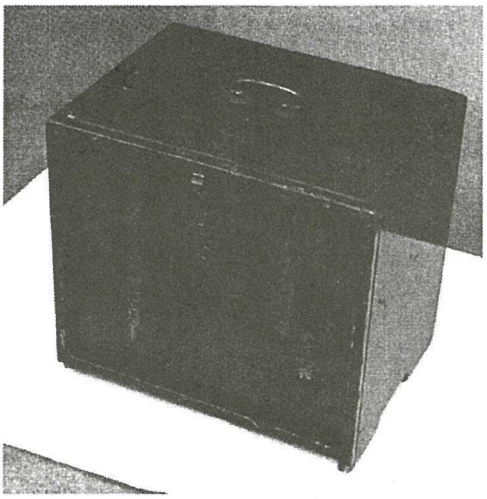
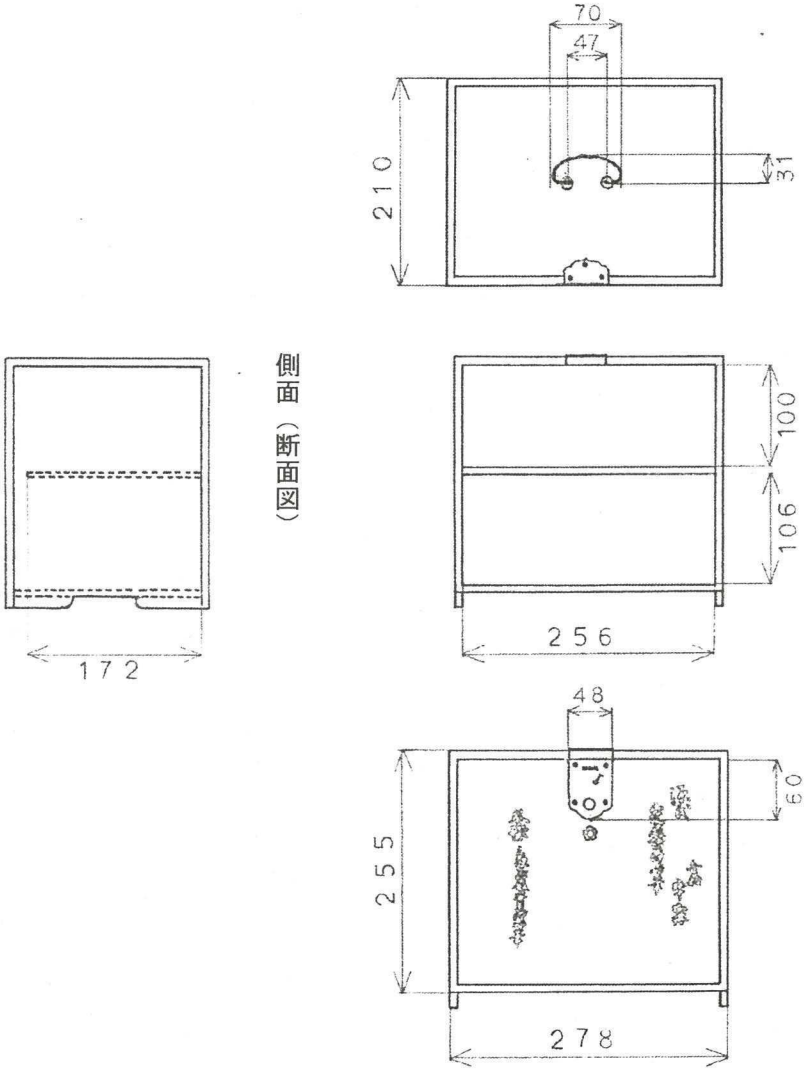


図2　塗箱の寸法



なお、議会図書館本には、蔵書印や識語など、旧蔵者や伝来を示す手掛かりは残されていない。

さて、議会図書館本の書誌について述べる。

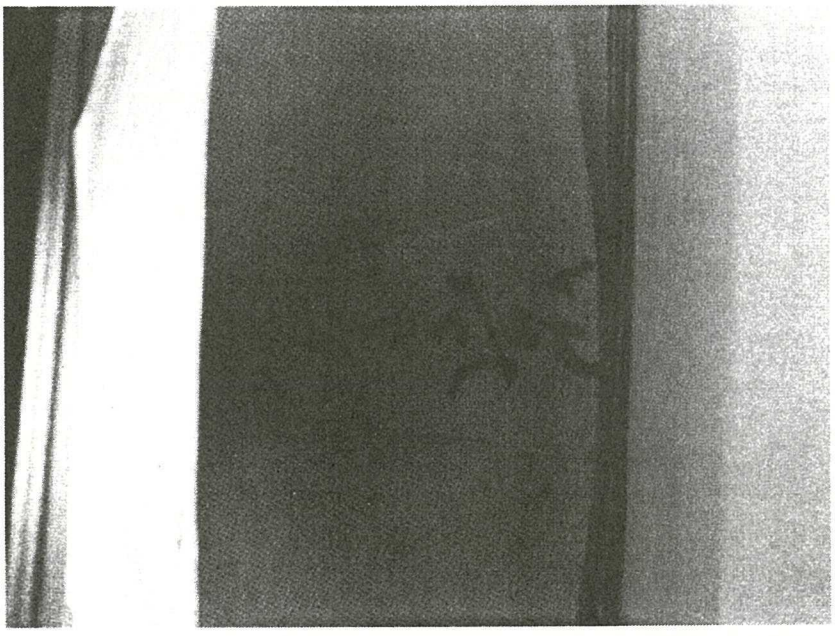
装丁は列帖装である。無地の濃青色表紙の中央に柿渋色の題僉を付す。料紙は鳥の子である。寸法は各巻によって違いがあるが、縦二五〇～二五二ミリメートル、横一六八～一七〇ミリメートルである。

表紙左端には、全巻にわたって押八双（左端から四ミリメートル付近に縦に上から下まで引かれた直線のへこみ）がある。袋綴装の場合、押八双は十七世紀末には見られなくなっていくとされるから（橋口侯之介『和本入門―千年生きる書物の世界―』平凡社、二〇〇五年、堀川貴司『書誌学入門―古典籍を見る・知る・読む―』勉誠出版、二〇一〇年など）、現在の表紙は十七世紀までのものとなろうか。

表紙見返の右端には、全巻にわたって、糊の跡と剥がされた和紙の一部が残っていて、表紙の付け替えがあったものと見られる。また、見返紙の裏上端中央（表紙と見返紙の間）には、全巻にわたって付箋が貼られ、巻名が記されている。表紙の付け替え時の仮題僉であると考えられる。**図3**は夢浮橋の付箋である。「ゆめのうきはし」の「ゆ」の字画が一部欠けており、これは化粧裁によるものである。議会図書館本は一度乃至二度の改装を経ている。

内題、尾題はなく、巻名を記すのは外題と仮題僉のみである。巻名については後述する。

図3　夢浮橋の仮題僉



次の**表1**に、各巻の寸法（縦ｃｍ×横ｃｍ）、墨付丁数、遊紙の丁数、括の数、括内の丁数（見返、裏見返も一丁とした）、半丁の行数、本文の総行数、特殊表記和歌（後述）の数をまとめて示す。

表１　議会図書館本の書誌概略

巻名	寸法(cm)	墨付丁数	遊紙丁数	括数	括内丁数	半丁行数	総行数	特殊表記和歌数
1桐壺	25.0×17.0	25	前1	3	8,12,8	8,9	429	
2帚木	25.2×17.0	41	前1	4	12,12,10,10	8,9,10	725	
3空蝉	25.2×16.8	9	前1	2	6,6	9	147	
4夕顔	25.2×16.8	37	前1	3	14,12,14	9	673	
5若紫	25.2×16.8	29	後1	4	8,8,8,8	10	573	
6末摘花	25.2×16.8	25	後1	3	12,8,8	9	441	
7紅葉賀	25.2×17.0	19	後1	2	10,12	10	379	
8花宴	25.2×17.0	8		2	6,4	10	152	
9葵	25.2×17.0	32		3	12,10,12	10	635	
10賢木	25.2×17.0	36		3	12,12,14	10	701	
11花散里	25.2×16.9	4	前1,後1	2	4,4	10	66	
12須磨	25.2×17.0	30		3	12,10,10	10	593	8
13明石	25.2×16.9	28		3	10,10,10	10	558	8
14澪標	25.2×17.0	24		3	8,10,8	10	472	8
15蓬生	25.2×17.0	16		2	10,8	10	317	
16関屋	25.2×16.9	6		2	4,4	9	99	
17絵合	25.2×16.9	14		2	8,8	10	269	
18松風	25.2×16.9	16		2	8,10	10	312	
19薄雲	25.2×16.8	22		3	8,8,8	10	434	
20朝顔	25.2×17.0	14		2	8,8	10	278	3
21少女	25.2×16.9	38		4	10,10,10,10	10	748	
22玉鬘	25.2×16.9	30		3	10,12,10	10,11	596	3
23初音	25.2×17.0	10		2	6,6	10	196	
24胡蝶	25.2×17.0	16		2	8,10	10	307	3
25蛍	25.2×16.9	14		2	8,8	10,11	281	5
26常夏	25.2×16.8	16		2	10,8	10,11	308	
27篝火	25.1×16.9	5	後1	2	4,4	8,9	83	
28野分	25.1×16.9	14		2	8,8	10	269	3
29行幸	25.1×16.9	20		3	8,6,8	10	392	1
30藤袴	25.1×16.9	12		2	6,8	10	236	
31真木柱	25.1×16.9	28		3	10,10,10	10	559	
32梅枝	25.1×16.9	14		2	8,8	10	271	
33藤裏葉	25.2×16.9	20		2	10,12	10	386	
34若菜上	25.2×16.9	77	後1	4	20,20,20,20	9	1376	
35若菜下	25.2×16.9	72		4	20,16,18,20	8,9	1282	
36柏木	25.2×16.9	30		3	10,12,10	10,11	603	
37横笛	25.1×16.9	12		2	6,8	10,11,12	244	
38鈴虫	25.1×16.9	14		2	8,8	9,10	254	
39夕霧	25.1×16.9	46		3	16,12,20	10	903	
40御法	25.1×16.9	14		2	8,8	9,10	275	
41幻	25.2×17.0	16		2	10,8	8,10	302	
42匂宮	25.1×16.9	10		2	6,6	10	196	
43紅梅	25.1×16.9	10		2	6,6	10	189	
44竹河	25.2×16.9	32		4	8,10,8,8	9,10	623	6
45橋姫	25.2×16.9	28		3	10,10,10	10	555	
46椎本	25.2×16.9	28		4	10,6,6,8	10	553	4
47総角	25.2×16.9	63	後1	3	18,24,24	9	1129	
48早蕨	25.2×16.9	14		2	8,8	9,10	272	
49宿木	25.2×16.8	60		4	16,16,16,14	9	1064	
50東屋	25.2×16.8	42		4	10,12,12,10	9,10,11	833	
51浮舟	25.2×16.8	44		4	10,12,12,12	10	874	8
52蜻蛉	25.1×16.9	36		3	12,12,14	10,11	727	2
53手習	25.2×16.9	42		4	14,10,10,10	9,10,11	814	
54夢浮橋	25.2×16.9	12		2	8,6	9,10	229	

議会図書館本は、半丁あたりの書写行数が一定していないという特徴がある（墨付最終丁を除く）。九行乃至十行が基本のようであるが、表1に示すように、行数が一定していない巻は、桐壺、帚木、玉鬘、蛍、常夏、篝火、若菜下、柏木、横笛、鈴虫、御法、幻、竹河、早蕨、東屋、蜻蛉、手習、夢浮橋の十八巻と、全体の三分の一に及ぶ。特に後半の巻に傾向が顕著である。

書写行数が一定しないと言っても、ランダムに行数が変わるわけではなく、行数の変わり方は大きく二種類に分けられる。桐壺のように、冒頭から四丁表までは八行、四丁裏からは九行と、巻の途中で行数を変える場合と、玉鬘のように、二十四丁裏のみが十一行で、ほかは一定して十行となる場合である。後者は、例外的に行数の異なる丁があるだけで、巻を通しての基本の行数は決まっていると見るべきである。帚木、玉鬘、常夏、若菜下、幻の五巻がこれにあたる。

一方、途中から書写行数を変えるものは、残りの書写量を勘案しながら、行数調整を行ったものとみられる。その巻の書写のために用意した紙数（括）に収まるように、あるいは、白丁をつくらないように書写をした結果、巻内の半丁ごとの行数に変動が生じたのであろう。しかし、調整しながら書写をしても、見開き左右両丁の行数にばらつきが出ないようにしている考えられる。巻末となる墨付最終丁を除いて、見開き左右両丁の行数が異なる箇所は、蛍の十一丁裏～十二丁表、篝火の十二丁裏～十三丁表、横笛の十丁裏～十一丁表、同十一丁裏～十二丁表、手習の八丁裏～九丁表のわずかに五例のみである。議会図書館本の書写においては、見開き左右両丁がひとつの単位として意識されていたと想定される。

議会図書館本の表記の特徴として、特殊表記和歌が挙げられる。一行で続けて書かずに、割注のような二行書を交えた表記方法を用いている。ここでは便宜的に特殊表記和歌と呼称する。

蜻蛉　十一ウ

しのひねや　きみも　なくらん　かひもなき　しての　たをさに　こゝろ　かよはゝ

表1から、特殊表記和歌が見られる巻は、須磨、明石、澪標、朝顔、玉鬘、胡蝶、蛍、野分、行幸、竹河、椎本、浮舟、蜻蛉の十三巻で、和歌の数は六十二首である。特殊表記和歌の全用例の写真と翻字は、神田久義・豊島秀範「米国議会図書館蔵『源氏物語』特殊表記による和歌一覧」（斎藤達哉ほか編『米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文―若菜上～幻―』、国立国語研究所、二〇一二年）に収録されている。また、特殊表記和歌に関する考察には、豊島秀範「アメリカ議会図書館本の和歌表記の特徴―和歌の一行散らし書きを中心に―」（『國學院大學大学院平安文学研究』第二号、二〇一〇年）、神田久義「米国議会図書館本『源氏物語』の書写形態に関する一試論」（豊島秀範編『源氏物語本文の研究』、國學院大學文学部日本文学科、二〇一一年）がある。

議会図書館本には、全巻にわたって、多数の擦消箇所を確認できる。紙を削って文字を消し、改めて文字を書き直している。擦消が書写時のものとすれば、親本の本文を精密に写し取ろうとする書写態度がうかがえる。原本調査によって確認した擦消箇所は、斎藤達哉・神田久義・豊島秀範・菅原郁子「米国議会図書館蔵『源氏物語』擦消一覧（桐壺～藤裏葉）」（斎藤達哉・高田智和編『米国議会図書館蔵『源氏物語』翻刻―桐壺～藤裏葉―』、国立国語研究所、二〇一一年）、神田久義・斎藤達哉「米国議会図書館蔵『源氏物語』擦消一覧（若菜上～幻）」（斎藤達哉ほか編『米国議会図書館蔵『源氏物語』翻刻―若菜上～幻―』、国立国語研究所、二〇一二年）、神田久義・斎藤達哉「米国議会図書館蔵『源氏物語』擦消一覧（匂宮～夢浮橋）」（本報告書に収録）に一覧されている。今後の分析が待たれる。

次に、議会図書館本の書入について述べる。議会図書館本には、墨筆、朱筆、鉛筆による書入がある。

鉛筆による書入は近代以降のもので、賢木、蓬生、少女、玉鬘の四巻にそれぞれ一例ずつである。いずれも鉤記号を用いて、何らかの区切りを示している。

少女　十一ウ



「つとへたり」と「風のちかう」の間に鉤記号

朱筆による書入は桐壺に二例だけ見られる。二例とも和歌の詠者を注している。

桐壺　五ウ



「かきりとてわかるゝみちのかなしきにいかまほしきはいのちなりけり」に「更衣」

桐壺　九ウ



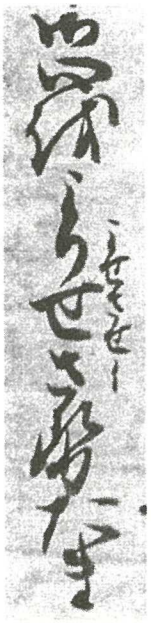
「みや木のゝ露ふきむすふ風のをとにこはきかもとをおもひこそやれ」に「きりつほのみかと」

墨筆による書入が最も多く、帚木（十二例）、空蝉（四例）、夕顔（五例）、若紫（三例）、末摘花（二例）、紅葉賀（二例）、須磨（十一例）、明石（二例）、澪標（一例）、薄雲（一例）、朝顔（一例）、少女（一例）、玉鬘（三例）、初音（一例）、藤袴（一例）、若菜上（二十八例）、若菜下（五例）、柏木（四例）、鈴虫（三例）、夕霧（三例）、御法（三例）、幻（一例）、紅梅（一例）、竹河（六例）、椎本（三例）、総角（八例）、宿木（八例）、東屋（二例）、浮舟（四例）、蜻蛉（三例）と、三十巻にわたって百三十二例である。

墨筆による書入には、異本注記、平仮名表記に漢字表記を注するもの、本文訂正、片仮名による読み仮名、濁音符などがある。

○異本注記の例

若紫　六ウ



「よりせさせ」に「よせさせイ」

○平仮名表記に漢字表記を注するものの例

若紫　十八ウ



「さえ」に「才」

○本文訂正（補入）

御法　一オ



「すみかにこりぬへく」を「すみかにこもりぬへく」に

○本文訂正（見消）

椎本　三オ



「ふたわたり」を「ふなわたり」に

○片仮名による読み仮名

総角　四十七ウ



「左」に「ヒタリ」

○濁音符

御法　四ウ



「なたいめん」の「た」に圏点

墨筆による書入は、筆跡から二筆と見られる。異本注記や平仮名表記に漢字表記を注するものが一筆、本文訂正、片仮名による読み仮名、濁音符がもう一筆と思われる。さらに検討を要する。

朱筆と墨筆とを合わせても、書入の数は百三十四例にすぎない。書入のない巻もあり、議会図書館本の書入は、総じて疎らである。議会図書館本は、高度な学習本として享受されてきたものではなさそうである。

書入以外にも、議会図書館本には旧蔵者の痕跡を見出すことができる。葵には薄紅色の不審紙がある。鈴虫と御法には、上欄に和紙を剥がした跡がある。かつては付箋があったのであろう。不審紙や付箋の跡について、詳細な確認は行っていないので、他日の調査を期したい。

なお、議会図書館本の書入は、神田久義・斎藤達哉・小木曽智信・高田智和「米国議会図書館蔵『源氏物語』書入一覧」（本報告書に収録）に全用例を掲げているので、参照されたい。

前に、議会図書館本には、外題のほかに、見返裏に仮題僉があると述べた。外題と対照させて巻名を示すと次のようになる。便宜的に一段目に通行の漢字表記による巻名を示し、二段目には外題による巻名、三段目には仮題僉による巻名を記す。

桐壺	きりつほ	きりつほ
帚木	はゝき木	はゝきゝ
空蝉	うつせみ	うつせみ　はゝきゝのならひ一
夕顔	ゆふかほ	ゆふかほ　はゝきゝのならひ二
若紫	わかむらさき	わかむらさき
末摘花	するつむ花	するつむ花　わかむらさきのならひ
紅葉賀	もみちの賀	もみちのか
花宴	花のえん	花のえん
葵	あふひ	あふひ
賢木	さか木	さかき
花散里	花ちるさと	花ちるさと
須磨	すま	すま

明石	あかし	あかし
澪標	みをつくし	みをつくし
蓬生	よもきふ	よもきふ　みをつくしのならひ一
関屋	せき屋	せきや　みをつくしのならひ二
絵合	ゑあはせ	ゑあはせ
松風	松かせ	まつかせ
薄雲	うす雲	うすくも
朝顔	あさかほ	あさかほ
少女	をとめ	をとめ
玉鬘	玉かつら	たまかつら
初音	はつね	はつね　玉かつらのならひ一
胡蝶	こてふ	こてふ　玉かつらのならひ二
蛍	ほたる	ほたる　玉かつらのならひ三
常夏	とこなつ	とこなつ　玉かつらのならひ四
篝火	かゝり火	かゝりひ　玉かつらのならひ六
野分	野わき	野わき　玉かつらのならひ六
御幸	みゆき	みゆき　玉かつらのならひ七
藤袴	ふちはかま	ふちはかま　玉かつらのならひ八
真木柱	真木はしら	まきはしら　玉かつらのならひ九
梅枝	むめかえ	むめかえ
藤裏葉	藤のうら葉	ふちのうらは
若菜上	わか菜上	わかな上

若菜下	わかな下	わかな下
柏木	かしは木	かしはき
横笛	よこ笛	よこふえ
鈴虫	すゝむし	すゝむし　よこふえのならひ
夕霧	ゆふきり	ゆふきり
御法	みのり	みのり
幻	まほろし	まほろし
匂宮	にほふ宮	にほふひやうふけやう
紅梅	こうはい	こうはい
竹河	たけ河	たけかは
橋姫	はしひめ	はしひめ
椎本	しゐかもと	しゐかもと
総角	あけまき	あけまき
早蕨	さわらひ	さわらひ
宿木	やとりき	やとりき
東屋	あつま屋	あつまや
浮舟	うきふね	うきふね
蜻蛉	かけろふ	かけろふ
手習	手ならひ	てならひ
夢浮橋	夢のうき橋	ゆめのうきはし

漢字／仮名などの表記の違いを除いて、外題と仮題僉とで巻名が異

なっているのは、空蟬、夕顔、末摘花、蓬生、関屋、初音、胡蝶、蛍、常夏、篝火、野分、行幸、藤袴、真木柱、鈴虫、匂宮の十六巻である。匂宮の仮題僉では、異名の「にほふひやうふけやう（匂兵部卿）」が記載されている。そのほかの十五巻では、「うつせみ はゝきゝのならひ」「ゆふかほ はゝきゝのならひ二」のように、巻名に並びの巻であることが記されている。

源氏物語には並びの巻が知られている。池田亀鑑編『源氏物語事典』（東京堂出版、一九六〇年）に整理された並びは、次の通りである。

二、ハハキギ　二ノナラビ、ウツセミ、ユフガホ
三、ワカムラサキ　三ノナラビ、スエツムハナ
十一、ミヲツクシ　十一ノナラビ、ヨモギフ、セキヤ
十七、タマカヅラ　十七ノナラビ、ハツネ、コテフ、ホタル、トコナツ、カガリビ、ノワキ、ミユキ、フヂバカマ、マキハシラ
二十二、ヨコブエ　二十二ノナラビ、スズムシ
二十七、ニホフ匂兵部卿　二十七ノナラビ、コウバイ、タケガハ

仮題僉の並びの立て方は、紅梅と竹河を匂宮の並びとしていない点を除くと、既知のものと一致している。

議会図書館本の見返裏の仮題僉は、改装時のものと推定されるので、可能性として、改装前の巻名を写し取った場合と、改装者が巻名をつけた場合とが考えられる。諸伝本と古注釈での並びの立て方を精査することで、解決の糸口が得られるかもしれない。

議会図書館本の本文系統について、伊藤鉄也「米国議会図書館アジア部日本課蔵『源氏物語』の調査概要」（斎藤達哉・高田智和編『米国議会図書館蔵『源氏物語』翻刻―桐壺～藤裏葉―』、国立国語研究所、二〇一一年）では、「今後さまざまな分野から検討が加えられるはずである。今は、伊藤の分類試案〈乙類〉とする。従来の〈別本群〉に近いものである」と、初音での校合結果をもとに、本文系統の見通しを述べている。

また、豊島秀範「「柏木」巻主要十一本対校の特徴―巻別稿本の具体例に即して―」（豊島秀範編『源氏物語本文の再検討と新提言』、國學院大學文学部日本文学科、二〇一〇年）では、「未確認の議会図書館本は、保坂本の本文の近似していること。国宝源氏物語絵巻詞書の本文もそれらに類似するところが多い。そして、それらの本文は、いわゆる河内本系の本文に近い」と述べている。

議会図書館本の本文系統については、源氏物語本文研究者による多角的詳細な検討が、今後期待されるところである。

最後に、議会図書館本の原本調査にあたり、米国議会図書館アジア部日本課の伊東英一氏、中原まり氏、ＰＩＰＨＥＲ・Ｙ清代氏に格別の御高配を賜ったことを記し、篤く感謝の意を表すものである。